

「皆」のために

奨励	岡崎 岳【おかざき・たけし】
奨励者紹介	日本キリスト教団須磨教会牧師 千鳥幼稚園園長

そのとき、ゼバダイの息子たちの母が、その二人の息子と一緒にイエスのところに来て、ひれ伏し、何かを願おうとした。イエスが、「何が望みか」と言われると、彼女は言った。「王座にお着きになるとき、この二人の息子が、一人はあなたの右に、もう一人は左に座れるとおっしゃってください。」イエスはお答えになった。「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない。このわたしが飲もうとしている杯を飲むことができるか。」二人が、「できます」と言うと、イエスは言われた。「確かに、あなたがたはわたしの杯を飲むことになる。しかし、わたしの右と左にだれが座るかは、わたしの決めることではない。それは、わたしの父によって定められた人々に許されるのだ。」ほかの十人の者はこれ聞いて、この二人の兄弟のことで腹を立てた。そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では支配者たちが民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、皆の僕になりなさい。人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのと同じように。」

(マタイによる福音書 20章20―28節)

こんにちは。岡崎岳と言います。神戸の日本キリスト教団須磨教会で牧師をしています。どうぞよろしく願います。今日は皆さんと一緒に聖書を読んでみたいと思っています。

二人の弟子の母親の特別な思い

春学期の統一テーマは「隣人を自分のように愛しなさい」という聖書の言葉であると伺っています。それで選んだのが先ほど読んでいただいた、マタイによる福音書20章20節以下です。聖書のなかには福音書と呼ばれる文書が四つあります。マタイによる福音書はそのなかの一つです。少し細かいことで申し訳ないのですが、このマタイによる福音書は、その次にあるマルコによる福音書をベースに書き換えられたもののなのです。著者は伝統的にマタイという人だとされていますが、本当の名前は定かではありません。便宜上マタイとさせていただきます。彼は、時代や自分が属していた教会のことを踏まえてマルコによる福音書の改訂版を書いたのです。ですから、あらずじとしてはマルコによる福音書と大きく変わるわけではありません。しかし、申しあげましたように、時代や教会の状況に応じて小さな書き換えをしていますし、付け加えている話もあります。

今日の話はその書き換えるの典型と申しあげてもいいような箇所です。内容を要約すると、偉くなりたいと思う者は人に仕える人になりなさい、ということです。それが弟子とイエスの会話という形で語られています。そのなかに書き換えがあります。それを丁寧に見ていくと、彼の言いたい何かが分かってくるのです。

最初の20―21節を読みますと、次のようになっています。「そのとき、ゼバダイの息子たちの母が、その二人の息子と一緒にイエスのところに来て、ひれ伏し、何かを願おうとした。イエスが、『何が望みか』と言われると、彼女は言った。『王座にお着きになるとき、この二人の息子が、一人はあなたの右に、もう一人は左に座れるとおっしゃってください』」。イエスには12人の弟子がいたと言われますが、そのうちの二人の弟子（お父さんがゼバダイと言いました）の母親の言葉です。彼女はイエスに、あなたが権力を握った時、自分たちの息子を右大臣・左大臣にしてほしい、とお願ひしたのです。

教会のなかで大切な存在となっていた弟子たち

マルコによる福音書ではどうなっているのでしょうか。興味深いことに、申し出るのは母親ではなくて弟子たち自身なのです。それをマタイはあえて母親と書き換えました。それはなぜなのでしょう。この福音書が書かれたのは、イエスが天に帰られてから40年ほど後だと考えられます。そのころイエスの12弟子たちというのは、権威的な存在になっていたのです。あのイエスの弟子ですから、ある種の神格化が起っていたのです。しかも本人たちはほとんど生きていません。たぶん全員すでに亡くなっていたはず。亡くなるとさらに神格化に拍車がかかり、教会のなかで大切な存在となっていたのです。そんな神格化されるほどの人たちがこんな発言をしたというのは格好が悪すぎる、とマタイが判断したためだと思われる。だから本人たちではなくて、本人たちの与り知らないところで母親が勝手なことを言った、という風に書き換えたのです。

「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない」

しかし、残念ながらその書き換えは不完全になっています。さらに言えば、逆に二人の弟子を貶（おとし）めているとさえ言えるのです。イエスは続けて「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない。このわたしが飲もうとしている杯を飲むことができるか」と聞かれると二人は「できます」と答えた、ということです。彼らの与り知らないところで母親が勝手なことをした、と書き換えたつもりですが、実際には彼らも同席しているのです。私などは、なんだ一緒におったんかい、と驚いてしまいます。それで（逆効果で）母親にイエスのところに連れて行かれ、さらに母親に代弁をさせたかのような形になってしまっているのです。いい大人が、さらに格好が悪いことになっています。滑稽とも思えます。現代でも、小学生くらいならば分からないでもありませんが、大学生とか社会人でこうだしたら、自分で直接言うよりもさらに格好が悪いはず。だから率直に言って、これは書き換えるの失敗例だと思います。ただし、失敗は失敗でも著者の意図のようなものは分かるわけです。

まだまだいろいろあります。わずかに9節しかない箇所、あと少なくとも三つの面白い書き換えがあるのですが、そのうちの二つは時間がないので割愛します。

「すべての人」ではなく「皆に」

私が本日話したいのは、残りの一つの書き換えです。今日の聖書を読むと、他の者たち（残りの10人の弟子たち）も二人のことで腹を立てた、と書かれています。それを見てイエスは（前後は省略しますが）次のように言われます。「あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、皆の僕になりなさい」（26―27節）。同じところのマルコによる福音書ではどうなっているかというと、「あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい」となっています。最後の言葉が「皆の僕になりなさい」ではなくて「すべての人の僕になりなさい」となっています。マタイは「すべての人」をあえて「皆」に書き換えました。ここに重要なことが隠されています。

マルコの「すべての人」というのは、文字どおり誰に対しても、ということです。親兄弟は勿論、町に住む人、国に住む人、全世界の人ということです。外国人であろうと日本人であろうと、ということです。非常にグローバルなのです。「隣人」という言葉に置き換えてもいいかもしれません。それに対して、マタイは「皆」に書き換えました。この「皆」とは誰を指すのか、ということです。文脈から考えると自分以外の弟子のことです。自分以外ですから、11人の弟子ということになります。決して世間一般ではないのです。弟子同士お互いに僕となり、仕え合いなさい、と言われているわけです。一気に範囲が狭くなった感じがします。全世界というグローバルな何十億人という話から、たった11人の話になるのです。一見、ものすごく後退しているようにも思えます。もの凄いくらいではありません。譬（たと）えようがないほどの後退です。しかし、実はここにこそマタイのメッセージが隠されているのです。

目の前にいる教会の顔の見える仲間に対して

マタイによる福音書は、四つの福音書のなかでもクリスチャンの集まりである「教会」というものを意識しています。生まれたばかりのキリスト教会を整えようとしているわけです。教会が教会として立つために、アドバイスをしたいと思ったのです。そこに出てきた書き換えが、「すべての人」から「皆」への書き換えです。確かに、グローバルではありません。しかし、逆に「すべての人」という不特定多数の抽象的な話ではなくなっているわけです。つまり、目の前にいる教会の顔の見える仲間に対して仕えてほしい、と書き換えたのです。ですから、この場合の「皆」というのは弟子のことであると共に教会員のことであるのです。教会員は相互に仕え合わなければならない、ということです。

濃い人間関係

教会に限らず、小さな集団における人間関係というのは簡単ではありません。関係が濃いために綻（ほころ）びが生じる、ということがあります。マタイによる福音書が背後に抱えていた教会でも、そういうことがあったのだと思います。他の箇所を読むと誰が一番偉いか、ということと揉めていたことが分かります。自分が中心・一番でなければ嫌だ、他の人より重んじられたい、ということです。決して理想的な集まりではなかったのです。だからあえてイエスの言葉を変えて、伝えたいことがあったのです。

この世のすべての人に仕える、という姿勢も大切です。それが悪いわけではありません。マタイもそう思っていたはず。しかし、それとはまた違って、身近な人に仕えていく、ということの大切さと困難さを、彼は感じていたのです。

映画「東京物語」からのメッセージ

小津安二郎という昔の監督の映画に「東京物語」というのがあります。1953年の作品ですから、戦後わずか8年目の映画です。今から60年前です。私が生まれるずっと前の白黒映画です。映像は綺麗ではありませんし、音声もはっきりしない映画です。しかし、私は名作だと思っています。ストーリーを簡単に申し上げますと、広島の実家に住む老夫婦が東京に行って、仕事をしている息子、娘を訪ねる、という話です。息子は開業医をしています。娘は美容院を営んでいます。一度遊びに来い、と言われて東京に行くのです。そこでの数日間を描いた映画です。妻の方はこの旅で疲れて、途中で体調を崩して尾道に帰って亡くなります。ただそれだけを淡々と描いているのです。ストーリーと申しあげましたが、ストーリーらしいものはないような映画です。では、何がいいのかと思うのです。この映画のよさは、家族の現実みたいなものを鋭く描いているところです。この家族は仲良しなのです。息

子や娘はお母さんが亡くなった時に心から号泣します。ですから老夫婦が勝手に東京に遊びに行つて疎まれる、という話ではありません。皆、仲良しなのです。しかし、東京に行った息子や娘にはそれぞれ新しい生活が始まっていて、両親はそれに馴染めません。そして、親子の気持ちちがなんとなくすれ違っていくわけです。決して、大喧嘩をするとか虐待される、ということではありません。一言で言えば老夫婦が寂しさを感じ始めた、ということです。小津監督は、家族ってそういうところがある、ということを伝えたかったのだと思います。いいことばかりではないのです。気持ちちがすれ違ったり、小さな喧嘩をしたりします。家族だけではなくて身近な人間関係には、どんなに愛し合っていたり、愛おしく思っている、そういう部分をもっているわけです。皆さんも家族との間、あるいは友人知人、あるいはサークルのなかで思い当たることはないでしょうか。「絵に描いたような家族」というような表現がありますが、まさに絵に描いただけで実際にはほとんど存在しない、ということです。何らかのしんどさ、すれ違いをもっている、ということなのです。それが家族の現実です。

気持ちのすれ違いが起こるところ

一緒にいるとしんどくなることがあるのは、教会でも同じです。同じイエスを信じ集まったのが教会です。同じような価値観の人が集まったのです。イエス様が好きで、神様を信じている人の集まりです。しかし、そこでも気持ちのすれ違いが起こります。家族と同じです。全世界の人が相手ならばいろいろなものの考え方をする人がいるので、争いもあるかもしれません。しかし、教会はいわば身内なのです。

何事も、不平や理屈を言わずに行いなさい

数週間前、聖書の箇所面白い言葉を見つけました。フィリピの信徒への手紙という文書です。フィリピという今のギリシアの町にある教会に書き送られたパウロという人の手紙です。パウロは世界伝道を始めた人ですが、このフィリピの教会は彼が一番最初につくった教会で、思い入れもありました。その教会に次のように言っているのです。「何事も、不平や理屈を言わずに行いなさい」。「何事も、不平や理屈」を言うてはならない、ということです。小学校の道徳の時間に習うような言葉です。これが教会に宛てられた手紙のなかにある言葉なのです。さらに次のように続きます。「そうすれば、とがめられるところのない清い者となり、よこしまな曲がった時代の中で、非のうちどころのない神の子として、世にあって星のように輝き、命の言葉をしっかり保つてしよう」。「不平や理屈」を言わないだけで、これだけの人になれる、と言うのです。それは逆から見れば、小学校の道徳で習うような「不平や理屈」を言わない、というのがいかに難しいか、ということです。教会という価値観が比較的同じような人の集まりでも然りだ、と言うのです。あるいは他の仲間内でも同じです。

今そこにいる仲間に仕える

話をマタイによる福音書に戻します。彼は決してグローバルな隣人愛に否定的であったのではないと思います。世界の人が愛し合えたらどんなにいいかと思っていたはずですが、しかし同時に、すべての人の僕になり、仕えることも大切だけれども、あなたの隣にいる、今そこにいる仲間に仕えることがいかに難しいことか、とも言いたかったのです。弟子たちはイエスの生き方、つまり、弱い人を大切に、権力者には勇気をもって言いたいことを言う姿勢に魅力を感じていたはずですが、そんなイエスと共に歩みたいと思って、イエスの弟子になりました。もしかしたら、それが世界平和に繋がると思ったかもしれません。しかし、気がつくとも弟子のなかで誰が偉いのか、という権力闘争・内輪揉めをしていたのです。矛盾しているのです。

マタイはそんな彼らの姿をただしたかったのではないのでしょうか。私たちには、「不平や理屈」を言わない、という小学校の道徳で習うようなことも難しいのです。仲間であっても、家族であっても難しいのです。いや、仲間、家族だから難しいのです。しかし、それを克服しようとする一つひとつの努力がされるときに、本当の平和の第一歩になるような気がするのです。全世界などと言わなくても、さまざまな意味での身内を大切に、そんな私たちが集まるならば、世界は変わるのではないか。マタイはそう、私たちに呼びかけているのではないのでしょうか。

2013年6月19日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録